言葉に出来ないくらい

Rikuta.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
言葉に出来ないくらい

【Ｎコード】
Ｎ１４４３Ｊ

【作者名】
Ｒｉｋｕｔａ．

【あらすじ】
言葉にならないくらい、君が大好きで大好きで、ただ好きなだけで
――

01　苦しい

小さい頃から俺の横には、アイツが居るのが当たり前で、それが普通だと思っていた。アイツは昔から、何を考えているか分からない奴だったし、やたらと俺様でオマケに意地悪だ。……ハッキリ言って性格は最悪だ。でも、俺が悲しい時、苦しい時、泣きたい時、傍に居てくれたのは
アイツだった。俺はアイツが堪らない位……ダイスキだ。

「……ら……そら……そら！」
「……ん……？」
「お前また此処で寝てたのか？　性格も身長も成長しないな」
「……うっさい……どうせ今日も行くんだろ？」
「そりゃそうだ。アイツ元気になったらしいから」
「はいはい。早く愛しの雅人君の所に行きましょうねー」

詩貴はズット沢田雅人の事が好きだ。小学校の頃に転校してきた雅人は、病弱で生まれつき心臓病を患っていた。その時偶然、詩貴と同じ班になった雅人は、それから詩貴と仲良くなった。
雅人はカッコ良いし、背も高いし、何よりとても優しい。
俺とは正反対。俺は背も小さいし、女っぽい顔がコンプレックス。

――俺は一回も雅人に勝った事がない。恋も勉強も、何もかも。

（あー……正直病院行くの嫌だな……）

気が乗らないのは当たり前だと思う。でも、詩貴と雅人が二人っきりになるのが嫌だから――

「アイツ元気かなー……病室何処だっけ」
「……はぁ……４０８だろ……」
「サンキュー。あ、此処だ」

――コンコン

「雅人！　久しぶり！」
「詩貴！　空！　来てくれたんだね」
「当たり前だろ！　な、空？」
「……え、あ、うん！」

……雅人の事は嫌いでは無い。大切な友達だ。でも、此処からいち早く抜け出したかった。
胸が苦しくて痛い……あんなに楽しく話している詩貴を俺は見た事がない。
その笑顔を一度も見せられた事がない。俺は……詩貴が好きだ……。
二人の笑い声が逆に俺を苦しめた。

02　両想い

病院の個室にしてはあまりにもデカイ部屋に、二人の幸せそうな笑い声が響いている。
久しぶりに逢うのだから二人とも嬉しいのだろう。無論、俺がその会話に入れる訳が無かった。
雅人は幸せ者だと思う。親にも友達にも恵まれていて、頭も良くて成績も優秀だから先生にも好かれている。そして、詩貴にだって好かれている。多分、完璧な人間とは雅人の事なのかも知れない。

「あ、あのさ、喉渇いたでしょ？　俺飲み物買って来るよ！」
「何だよ空、気が利くじゃんか」
「何言ってんの？　雅人と俺のだけだよ！　詩貴には買って来てあげない！」
「ケチな奴だなぁ……でもお前金無いだろ？　俺買って来るよ」
「あ……そうだった……ごめん……」
「いいよ別に」

”ポンッ”と俺の頭を叩いて個室から出て行った。詩貴はズルイ……俺の気持ちも分からないくせに、すぐ俺の喜ぶ事をしてくる。何か、無関心って罪だ……。

「何か僕、空が羨ましいな」
「……え？」
「だって、学校にも普通に行けてるし……友達多いし、詩貴と仲良いから」
「雅人だって、友達多いしさ、詩貴と仲良いじゃん！」
「うーん……意味が違うんだよなぁ」

「……？？　意味分からん」

（何を言ってるのかが、よく分からない……）

「……話変わるけど、詩貴って好きな人居るのかな？」

「え！？　な、何で……」

「いや、空なら知ってるかなぁ……って思ってさ」

「……分かんない」

「そっかぁ……俺はね、詩貴と出会ってからズット詩貴が好き何だよね」

――え……？

「わりぃー、遅くなった。雅人の好きなジュース出てたぞ！」

「本当？　有難う！」

「空は、身長伸ばす為にイチゴ牛乳！　……って、空……どした？」

一瞬、雅人が言った言葉の意味を理解出来なかった。いや、違う。ただ意味を理解したくなかっただけなのかも知れない。詩貴と雅人が両想いだって事を――

（ヤバイ……泣きそうだ……）

多分今、詩貴に触られたら絶対に泣いてしまう。

「おい、空聞いてるの……」

「あ、ゴメン！　俺、寮に戻らないと！　呼び出されてたんだ！」

「はぁ？　何言ってんだよ」

「先行ってるね！　雅人またね！」

俺は全速力で病院から逃げるようにして走った。もう夕方の5時位で、空は少し暗くなっていた。

だからだろうか、辺りの人が俺の目から溢れ出ている涙にも、気付いていなかったのわ――

俺と詩貴は全寮制の高校に通っていて、寮では同室だ。嬉しいと言えば嬉しいのだが、泣きたい時に泣けないのが困る。何故かというと、詩貴は俺が泣いてると必ず理由を聞いてくるからだ。

（どうしよう……泣いてるの絶対にバレないようにしないと……）

でも次から次へと溢れ出て来る涙には逆らえなかった。もう少しで詩貴が戻ってくるから、それまでに泣き止まないと。

「はぁ……いつからこんなに弱くなってたんだ俺……あんな事で動揺する何て……」

いっその事、詩貴を嫌いになれば楽なのに。詩貴から離れれば楽なのかも知れない。

でもそんな事自分には出来ない……出来る勇気が無かった。苦しくても辛くても詩貴が大好きだから。

03　辛くても

嫌な夢を見ていた。詩貴が雅人と付き合っている夢。夢の中の二人は凄く幸せそうで、それを見ている俺は酷く悲しい顔をして二人を眺めていた。この夢が現実になりそうで怖い。俺から詩貴を取ったら、俺はどうなるんだろう……。そんな事考えた事すら無かった。だって、いつも一緒に居るのが当たり前だったから。詩貴を取られたら、俺に何が残るんだろう……。

（ん……眩し……っ）

「うわっ、空お前部屋に電気も付けずに何してんだよ！？」

「……ん……アレ……？」

（泣いてるうちに寝てたのか……）

「……空お前泣いたのか？　目が赤いぞ」

「ううん、違う。寝起きだからだよ」

「……嘘だな、何かあったのかよ？　急に帰るから雅人も心配してたんだぞ」

「……ゴメン……」

「別に良いけどさ。本当にどうしたんだよ」

「何でもないってば」

「そっか。でも、お前すぐ溜め込むからさ、心配になっただけ」

詩貴の一つ一つの言葉が今の俺に強く響いてきて、今気を緩めたら泣きそうな位嬉しかった。

詩貴は俺の事を親友としか見てない。もうそれで良いんじゃないか、

と一瞬思ってしまった。

「そういえば、雅人さ明日から学校来れるって！　寮には来れないけど、学校には来るってさ」

「本当？　良かったね！」

「うん。俺アイツにはいつも笑ってて欲しいんだ。アイツの笑顔好きだし」

「……あー、本当に雅人が好き何だね！　早く付き合えば良いじゃん！」

「アイツ俺の事好きなのかな……」

「……相手に伝えないと伝わらない事だってあると思うよ？」

「……そーだな、お前の言う通りだ」

俺だって、詩貴にはいつも笑ってて欲しい。だから、俺が辛くても詩貴が幸せならそれでいいや。

◆　◇　◆

「詩貴！　空！　皆久しぶり！」

次の日雅人は学校に来た。相変わらず雅人は皆の人気者だ。詩貴も嬉しそうだし、良かった。

「雅人！　お前が学校に来れなかった分、ノート取ってやってたんだ！」

「え？　本当？　詩貴有難う！」

（まぁまぁ……詩貴も雅人も幸せそうな笑顔しやがってさ）

「何変な顔してんだよ、空」
「……うるさい、お前には関係ないだろ、尚」

コイツは笹木尚。俺にいちいち突っかかってくる男。……とゆーか、入学当時にコイツから告白をされた事がある。勿論振ったけど、何かと今でも口説いてくる目敏い奴だ。
王子様見たいな顔してるけど、性格は最悪最低だ。サディストとはコイツ見たいな人の事だと思う。

「ふぅーん……アレが原因ね。ついに振られたとか？」
「……馬鹿か」
「俺ならお前にそんな顔させたりしねぇーけど？」
「……うるさい」

季節はもう秋で、担任が文化祭の話をしている。去年の文化祭は詩貴と出店周ったりして凄く楽しかったな。でも、今年は雅人と周るのかな……。もし詩貴に、誘われたとしても2人の間に入る事だけは絶対にしたくない。だから、実行委員会やろうかな。実行委員会は忙しいから生徒にも人気が無い。

「ハーイ！　先生、俺実行委員やりまーす」
「え、まじで？　空本気かよ」
「うん」
「ふーん……3人で周りたかったのにな？　雅人」
「うん……でも、空がやりたいなら仕方無いよ」

（何か俺自分から墓穴掘ってる気がする……）

「んじゃ俺も実行委員やりまーす」
「は！？　何で尚が！？」

「何って、やりたいから？」
「……はぁぁぁぁ……っ……」

（何で尚何だよっ！）

結局、文化祭の役割は俺と尚が実行委員で、雅人と詩貴は出店係りになった。本格的に始動を始めるのは明日かららしい。それにしても、気が乗らない……。

０４　波乱の文化祭準備

皆の笑い声や、騒々しいほどの色んな音で学校中が盛り上がっている。これからは文化祭が近くなる為に、授業がほとんど無いのが嬉しい筈なんだけど、俺は目が違う方ばかりにいってしまって、仕事に身が入らない……。何故かというと、詩貴と雅人が気になるからだ。

（べ……別に、雅人が羨ましいなぁーとか思ったりしないけどさ……でも、なんだかな……）

変な事ばかり考えていると、頭を誰かに叩かれた。

「……って！　何すんだよ馬鹿尚！！」
「きちんと仕事しろよな、誰かさんばかり見てないでさ」
「……っ！！　尚だってしろよな！」
「だったらコレ教材室に持ってけよ」
「ハイハイ！」

尚は本当に性格最低だ……。俺が握力あまり無いの知ってるくせにこんなに重いの普通持たせるかよ……。尚が俺に持たせたのは、見た目より重いカーテンだった。３枚くらいあり、その高さのせいで背が小さい俺は、前の視界がよく見えなかった。

「何でよりによって２階にあるんだよっ！　って……ヤベ！」

階段を踏み外してしまい、後ろに落ちる寸前で誰かに後ろから受け止められた。もしかして、詩貴だろうか……という俺の可愛い期待

は、後ろを見た瞬間に簡単に崩れてしまった。

「……なんだ、尚か」

「何だって何だよ。せっかく助けてやったのに」

「ありがと！　心配になって助けに来てくれたんだろ？　どーも」

「いや、俺も教材室に用があっただけだ」

「あーそうですか！」

（何コイツ、まじ苛付く奴）

実行委員は思った以上にハードなもので、体力的にも疲れる役割だった。帰りも残るとか言ってたから、詩貴とも一緒に帰れそうに無い。詩貴にその事を言って置こうと思い、教室へ向かった。

「皆帰ったのかなー。あ、教室に明かり点いてる」

詩貴が居る事を願い、教室へ足を踏み入れようとした。でも、教室からは詩貴と雅人の声が聞こえてきた。恐る恐る、教室を覗いてみた――

（嘘……だろ……？）

目の前にはキスをしてる、詩貴と雅人が目に入ってきた。俺の見間違いだと思いもう一回見てみても、それは紛れも無く詩貴と雅人。目の前の現実にどうして良いのか分からなくなった。足に力がはいらなくて、そこから動けなかった。目から一粒の涙が零れ落ちて、それはやがて大粒の涙に変わった。

「……空？　お前そこで何してんだ……」

「……な……お……？」

名前を呼ばれて横を振り向くと、そこには尚が立っていた。俺の泣き顔を見て吃驚したのか、尚は目を見開いて俺の方を見ている。涙を必死に止めようとしたけど、止まらなくて……。

「あ、ごめ……アレ……おかしいな……止まんな……」

「……誤魔化すなよ……」

そう言うと、尚は俺の手を強引に引っ張り学校から飛び出した。そして、着いた先は学校の近くの公園だった。

「……空、大丈夫かよ」

「え、うん……何でも無いよ！　目にゴミ入っただけ……」

「誤魔化すなって言ってんだよ！！」

声を荒げた尚に吃驚した。いつもは、クールぶってる尚が本気で怒って来たから。

「泣きたい時は泣けって……俺だってもうお前の苦しそうな顔見てらんねぇーよ」

「っ……うるさい……お前に何が分かるって……」

「お前が詩貴の事好きなのは分かってる……でも、俺だってお前が好きだ。

お前の傍に居たら、駄目か？」

詩貴を嫌いになる事何て出来る訳も無いし、勿論離れる事だって絶対に出来ない……。でも、尚の傍に居たら、いつか詩貴を忘れられる事が出来るのかな……。

「分かんない……俺は詩貴の事嫌いになれない……」

「それは分かってる。ただ、お前が一人で苦しむ姿は見てらんねぇ……」
「……ん……っ」
唇に暖かいモノが当たった。それが何なのか理解できたのは数秒たってからだった。尚のキスは凄く優しくて、凄く尚の気持ちが伝わって来て……尚を見てると今の自分を見てるようで苦しかった。好きなのかも、嫌いなのかも分からない人にキスをされてるのに、俺は拒まなかった。
これは傷の慰め合いなのかも知れない。そう知っていても、俺は尚に縋ってしまった。詩貴と雅人の事を早く忘れたくて、何度も何度もキスをした。
「……っ……尚、俺お前の事好きかも分からないのに、尚を傷つけてしまうかも知れないのに、
こんな事しちゃって良いのか……？」
「良いんだ。それでお前が辛くないなら」
あまりにも優しすぎてまた涙が出て来てしまった。俺は最低最悪の人間だ。人の優しさに漬け込んで、
最低な事をしてしまった。もう詩貴を好きでいる資格何て無いのかも知れない――
この日をキッカケに、俺は詩貴と雅人と距離を置く様になってしまった。

０４　波乱の文化祭準備（後書き）

いきなり急展開ですね（＾ω＾；）
でも、まだまだ序の口です！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1443j/

言葉に出来ないくらい

2011年1月16日09時57分発行